日本流通産業新聞

第1018号　Direct Marketing News & Data

http://www.bci.co.jp/
news@nb-club.com

2006年（平成18年）4月27日・5月4日 合併号
（週刊・毎週木曜日発行）

発行所　㈱日本流通産業新聞社
〒103―0026東京都中央区日本橋兜町11―11ニッシンビル2F
TEL　03(3669)3421（大代）FAX　03(3661)5509
編集局直通　03(3661)5898（代）
年間購読料31,000円／郵便振替00180―2―18323

顔顔顔

株式会社オンテックス
代表取締役会長兼CEO

小笹　公也　氏

塗装技術で一大企業を作った男

『他人と自分を比べたってつまらんでしょ』

仕事って一体何だろう。そう考えたとき、関西を代表するリフォーム企業を育て上げたオンテックス・小笹会長の存在感が際立ってくる。中卒のCEO、元プロボクサーとされまでにも決まって冠せられた形容詞。そんなものは、人物を表すほんの一部分の意味しか持たないのではないか――。ただ一方で、小笹会長を貫いてきた大きな身上である「好きなことしかやらない」との姿勢は、改めて意味を持ってくる気がするのだ。フリーター200万人、ニートは60万人以上と、社会の抱える状況は教育機関の存在意義や勉学の意味を問うている。「勉強は嫌いやった」と公言する同氏の生き方と成功が、直接的にではないかもしれないが、学歴や教育の意味づけに大きな風穴を開けている気がしてならない。

（取材・構成　満富俊吉郎）

晴れて大学を卒業した会長兼CEOの感慨

小笹は今春、30代の最後半で入学した同志社大学商学部を無事、卒業した。会社の代表取締役会長兼CEOとしての立場を抱えたままの入学、そして卒業。

「ホッとしたというんですかね。ヤレヤレという感じです。本当は3年で飛び級して大学院に行くことも狙っていたんですが、それにはいったん退学しないといけないという。大学も卒業できないままで院の試験に受からなければ、単なる中退になってしまうので（笑）、とりあえず卒業だけはしようと思ったところです」

口で言うのは簡単だが、前述のように小笹は中学しか出ていない。また、大学に行くことを志したのも学歴コンプレックスなどというものでは決してなく、自分が代表を務める関連会社にIT企業があり、ITのことが分からないのはまずいと思ったことがきっかけだった。新聞でIT関連の大学が学生を募集していることを知り、受験を決意するが、やはり高卒の資格は必要になる。

「聞いたら大検いうのがあるという。8月と11月に試験があって、9科目でしたね。思い立ったのが6月の終わりでしたか、それから準備して8月に5科目受かり、11月は残りの4科目、2001年の12月に合格しました」

その後、事業の都合などからITの勉強はとりあえずは必要がなくなった。

しかし、母親の法事で顔を合わせた実姉から「それやったら、別の大学を受けたらええやん」と言われ、翌年の同志社大AO（アドミッションズ・オフィス）入試を受けて、晴れて大学生になったわけである。

いきなり難関といわれる大検を突破するのも相当なことだが、大学生活も決して手を抜くことはなかった。

「授業は無遅刻でほぼきちっと通いましたよ。それは大変はと大変でしたが、今はパソコンで仕事の指示もできるので、大学生活を最優先にやりました。若い仲間もできましたし、面白かったですよ、エエ」

今春、同志社大学商学部を卒業（卒業証書を受ける小笹公也・オンテックス代表取締役会長兼CEO＝写真中央）

小笹が「面白かった」というのには多少、含みがある。それまでは分からなかった大学生像が、よく理解できたというのである。

「自分の期待したよりは、はるかに効かったですわ。学生で大変でしたが、今はパソコンで仕事の指示もできるので、大学生活を最優先にやりました。若い仲間もできましたし、面白かったですよ、エエ」

悪ガキだった少年時代 中卒後、調理の道へ

大阪・阿倍野区生まれ。父親は大阪府の会館で和食の料理長をしていた。つまり、身分は地方公務員。そんな立場もあってか、父は大人しく真面目な人で、ガミガミうるさいこともなかった。

一方、兄弟は姉と兄がおり、どちらも成績が良く優秀だったという。ところが、小笹自身は学校では落ち着きがなく、教師の話を長いと聞いていられる性格でもなかった。「悪ガキだった」と称する所以である。

「いちびりやったですな。まっすぐ前向いて、授業を聞いていることはなかったですから。もう、小学校高学年で喫茶店に行くような子どもですから、想像してもらえるでしょう」

本人は「学校には行っていた」と言うが、授業はサボることが多かったらしい。「勉強は嫌いやった」というのも、掛け値なしの本音のようだ。

本社の会長室で小笹は「最近、実家の荷物を整理していたら、こんな物が出てきた」と笑いながら、自分の中学時代の成績表を見せてくれた。本人をくさす気は全くないが、成績は見事に「1」（5段階評価）ばかりである。ある学期には「資料不足のため判定不可能」の文字が、大きく踊っていた。「とんなもん見せるのは、あなたが初めてですわ」とまた笑った。

当然のごとく、家族も認める中卒後の就職。「手に職を付けるのが一番」ということで、始めは大阪府南部の山間地にあるホテルで板前修業を行った。

「いわゆる追い回し（小間使い）で修行はそれは厳しかったですね。ただ、このときに厳しく鍛えられたので、先を読んで行動する習慣は身に付けられた。常に動いてないと怒られますからね。先々、これは役立ったと思います」

詳しい経緯は省くが、ここは板前内部の事情等もあって程なく退職、次に入った割烹料理店も長くは続かなかった。16歳の頃だった。

この後、ブラブラしているときに出遭ったのが例のボクシング。中学時代の友人が近所の風間ボクシングジムに通っていることを知り、通い始める。一緒に入った友人たちはすぐに辞めたのだが、好きなことには執着する小笹は続けた。そして、年齢制限のあるプロテストに17歳になってから合格し、デビュー戦も経験した。

「ジムに入った頃、先輩にペンキ屋のアルバイトを紹介してもらい、昼はバイト、夜はボクシングの生活をしていたわけです。仕事中に水をがぶ飲みしていたこともあって腸をやられちゃいましてね。デビュー戦は悲惨でしたね。試合中に恥ずかしい様は見せられませんから、とにかく早く終われって……試合どころじゃないですよね」

小笹のプロボクサー歴は、このデビュー戦の4回戦、判定負けが唯一の記録である。

事業は順調に拡大も バブル崩壊後に転機が

前置きが長くなったが、小笹の真骨頂はこの後、大きく花開いていくことになる。

バイトで出遭った塗装の世界に、ズンズンとのめり込んでいったのだ。

「塗装の仕事は天職のように思えましたね。クルマが好きだったので、あちこちの現場に行くのが実に楽しかった。それに仕事も夕方には終わるじゃないですか。それから仲間と飲みに行ったりとか……板前の仕事は人が遊んでるときに仕事で、夜は遅くて遊べへんでしょ。この仕事は合っていたというか、リズムがいい感じでしたね」

自らの言葉に違わず、もともと手先が器用だった小笹は、ボクシングを辞めて塗装一本で行くと決めてから、急速に頭角を現した。仕事は誰よりも速く、仕上がりも負けたことはなかったと小笹。

事実、17歳で就職を決めた「榎本塗装」では、2年後の19歳で現場長として数人の職人を使うまでになった。

「団地とか高い鉄塔の仕事とかいろいろな現場があったわけですが、自分の腕のレベルは分かっていましたからね。よその下請けと一緒にやって、まず負けたことはなかった。われわれの方が手は速いし、技術力も高かったですね」

ゆるぎない自信は、このわずか2年ほどの後に独立の機会も与えてくれた。親方が急に「もうお前は一人前やから独立せい！」と背中を押してくれたのだ。

小笹が独立して「オザサ塗装工業」を構えたのは1984年7月。構えたといっても、シャッター付きガレージで中古車1台、見習い職人一人を従えての独立。それでも、その高い技術力と真面目な仕事ぶりは評価され業績は拡大、4年後には「株式会社オザサ」として法人化、名実ともに経営者の道を歩み始める。

当時の建設ブームもあって業容は急速に拡大していた。しかし、バブルの崩壊はもともと"契約"のない業界での代金の遅払い、不払いの恐怖を小笹に与え続けた。実際に、何回も遅れ続ける支払いに業を煮やし、相手の親会社に働きかけることで何とか売り掛けを回収したこともある。

「これはアカンな」というのが当時の実感と話す小笹。ここから元請け企業に脱皮を図ることが、大きな転機になったとも述懐している。

「セラミックの粉末を混ぜた塗料を吹き付けると、壁が大理石とかそうした石材を張り付けたような仕上がりになる技術があって、これはウチは得意だったんですね。で、これを団地とかマンションではなくて、一般住宅用にできへんかなと思っていて、これを塗料メーカーに『ウチのオリジナルとしてでけへんか』とたのみに行きました。ある中堅のメーカーが作ってくれることになってOEMで作ったのが『オザキスト』。これが好評でね、その後営業成績がガーッと伸びたわけです」

ナンバーワンよりはオンリーワン――。オリジナル商材を持つことがいかに大事かと知った小笹は、その後も大学研究所などと協力体制を作ることで、優れた断熱効果を持つ塗料『E―テックス』、さらに大きな遮熱効果を持つ塗材『サーモテクト』など、住宅やその周辺の環境にも優しい新製品を次々に開発。マスコミにも大きく取り上げられてきた。

プロフィール

小笹公也（おざさ・ともや）氏……1963年大阪市生まれ。78年4月頃より塗装業のアルバイト始める。84年、オザサ塗装工業創業、88年㈱オザサに改組し、代表取締役社長。2000年、社名を㈱オンテックスに変更。02年、オンテックスグループ代表取締役会長兼CEO。現在、ベンチャーマネジメント協議会理事。趣味は魚釣り、料理など。競走馬も所有しながら、競馬を楽しむ。05年3月期同社売上高は112億3400万円。

意外に繊細？ 計画性重視の性分か

個人的な印象ながら、小笹の真面目（しんめんもく）はやはり「好きなことはトコトン極めたい」という性情、負けず嫌いからくる一徹さ、そして外見とは少し違う細かさ、計画性ではないかと感じる。

勉強嫌いの悪童だったといいながら、大検にわずかな準備期間で受かる集中力、負けず嫌いは、自らの技術や仕事への取り組みによく現れている。そして、「意外に細かく、心配りがある」と社員の一人が話すように、仕事の"段取り"や"先見力"には、並々ならぬ努力を注いできたとの自信がある。

やはり単なる悪ガキではなく、明晰（せき）のDNAは頭脳に組み込まれているのだ。

ちなみに、優秀だったという兄・芳央は早大を出てリクルートに入社、現在は独立してコンサルティング会社を興し、一家を成している。その世界ではよく知られた存在である。

2000年7月、社名もオンテックスに変更。住宅の外壁塗装をメーンにしながらも、生活総合住宅企業として版図を広げる同社。何よりも誇るのは、その技術力と仕事請負人（師）としての責任感、サービスだと声を強める。

「施工の後も最後まで責任を持つことが第一。どんなクレームも、それが出たら恥やからね。営業マンにも教育は徹底してやっていて、お客様に誠実に対応する職業意識は育てているつもりです」

今春には、業界でもちょっと例のない、直属の技術教育センターを完成。14人の社員が施工技能を研修中だ。やはり、小笹は"職人"の出であることに、今も強い誇りを持ち続けている。

（文中敬称略）